

名も知られない田舎の風景が 地域再生の資源に…



真庭遺産研究会 事務局長
徳永 巧

昔から残る田舎の風景は、その土地の気候、地質、歴史・生活文化など自然環境、人文環境、社会環境を語りかける地域固有の資源である。

残したい故郷の風景を地域資源として活用し、観光振興と地域の活性化を進めるには、地域住民が自分たちの暮らす地域の自然や景色のよいところを認識し、それを資源として活用しようという機運を地域に高めることが第一に必要である。ここでは、その手法について紹介する。

これまでの活動の経緯

私は、いわゆる観光業や集客サービス業に関係した人間でもなければ、行政担当者でもない。どちらかといえば、自然環境保全分野の技術者あるいは実践家に属する人間である。とりわけ、生まれ故郷である真庭地域および大山蒜山地域をフィールドに自然環境保全の分野において活動を続けており、その経験とノウハウを活かしての地域資源活用である。

これまで25年以上にわたり、美しい日本の自然や風景を大切にしたいということで地域活動を展開してきたことが、結果的に地域の隠れた魅力を引き出し、「自分たちの暮らす地域（真庭）は捨てたものではない。ふるさとに残る美しい自然や景観、文化遺産、産業を大切にしよう、これを資源として地域の活性化に結びつけよう」という地域住民や自治体の機運を高めることの一端になり、観光分野にも波及しているととらえている。

また、日本らしさ、田舎（地域）らしさ、懐かしさが残る地域を訪ねることで、心をなごませ、感性を豊かにし、人間らしさ、自分らしさを回復させるような旅や、風情とか情

緒などを求めて地域を訪ねる主体的な観光が強く求められる時代に入り、我々のような田舎の自然や風景を大切にし、地域の固有の魅力を残そうという活動や人間が重宝がられるようになりつつある。

そして真庭遺産研究会の活動は、そのような美しい日本の自然や風景を大切にしようという「思い」を「形」として残すべく、自然科学的技法および人文・社会科学的手法のもとに実践的に取り組もうという試みであり、環境アセスメント、グラウンドワーク・トラスト、エコミュージアムの技法・手法を活用し、「生物多様性を保全」の活動を通じた地域づくりを進めている。

真庭遺産研究会は、岡山県においてグラウンドワーク活動を実践する活動組織として、平成11年5月に結成された住民団体で（前身の真庭遺産の会は平成7年発足）、地域住民が大切にしたいと思っている故郷（真庭）の自然や景観、風物詩、原風景、歴史的資源、古民家、大きな木、伝統技法などの遺産的資源を調査・紹介することで、その保護保全をはかり、「美しい日本の自然と風景の保全再生」をめざしている。会発足以来、地元自治体との連携で調査研究活動や環境保全活動を展開しており、主な活動として、景観シンポジウム「蒜山地域の景観の保全と形成を考える」の開催をはじめ、郡内各地で古道（旧街道）シンポジウム、里川ワークショップ、水辺の環境学習会、希少植物調査会、古民家保存調査会、茅葺き民家保存活用のシンポジウムを開催するほか、環境資源冊子作成を行うなどの活動を行ってきた。

これら真庭遺産研究会での環境保全活動や

啓発活動ほか、散在する古民家、火入れ草原、特別天然記念物オオサンショウウオ、古道「大山道」、名峰大山の風景などを地域資源とした観光交流事業も取り組んでおり、地域住民や自治体との連携・協力のもとに事業展開を進めている。

以下、具体的な活動として、古道「大山道」と特別天然記念物オオサンショウウオを地域資源とした活動について紹介する。

活動事例1 古道「大山道」を地域資源とした活動

1991年より、中国地方の最高峰にして日本百名山でもある伯耆大山（標高1,729m）の南麓に位置する鳥取県江府町において、奥大山自然博物館構想を進めており、奥大山と呼ばれる大山南側の山岳高原地域において、自然環境を調査紹介する活動を行ってきた。

奥大山自然博物館は、奥大山一帯をフィールドミュージアムとして活用するエコミュージアム事業がベースとなっており、名峰大山のビューポイントの景観保全とあわせて里山生態系の保全活動としてギフチョウの保護活動を行ってきた。

そのような活動の経緯もあり、2008年4月にグラウンドワーク大山蒜山を組織し、大山蒜山地域を中心舞台として自然学校事業を進めており、大手飲料メーカーでもあるサントリーが鳥取県で進める次世代環境教育事業「森と水の学校」に深くかかわっている。

その鳥取県江府町においては、霊峰大山の



古道「大山道」の復元整備作業

山麓における生物多様性豊かな森林環境と里山風景の保全再生、ギフチョウをはじめとする里山生態系の保全とあわせて、「大山道」という大山山麓から中腹を巡る古道（山岳宗教の道であり、牛馬取引の道）を地域資源に、住民・NPO等や沿線に暮らす農家などが広域的な連携をはかりながら、「大山道」などの大山山麓の自然文化遺産や美しい名峰の眺望、農村風景を観光資源として活用したツアー・プログラムなどを策定し、閉鎖されていた江府町の観光交流施設エバーランド奥大山を拠点として活用してエコツーリズム事業、自然学校事業の推進を行っている。

古くから信仰の山であった霊峰伯耆大山は、「大山道」と呼ばれる古道がその山腹および山麓を通っているが、大山南麓域が山林の荒廃により通れなくなっていた。そのため、伯耆の国（鳥取県）と美作の国（岡山県）を結ぶ古道「大山道」は、江府町部分によって分断されており、大山道の保存、復元、活用への期待が高まっていた。

ここでは、大山道（古道）の保存復元に係る住民・NPO等や沿線に暮らす農家などが連携し、大山道を活用して地域の再生・活性化をはかる協議会（奥大山古道保存協議会）を発足させ、観光交流事業を進めており、これまで倒木や笹の繁茂によって歩けなくなっていた大山道沿線（江府町区間）の荒廃した山林に手を加え、かつての大山道の環境や景観をよみがえらせ、古道を復活させることと、古道「大山道」について様々な角度から調査



古道「大山道」を語るミーティング

研究を行い、その情報を印刷物などのメディアで紹介することで、広域的なトレッキングエリア活用を進めるにいたっている。

活動事例2 特別天然記念物オオサンショウウオを地域資源とした活動

オオサンショウウオは国の特別天然記念物であり、絶滅危惧種に指定されている。とりわけ、岡山県真庭市は、面積の約4割が天然記念物「オオサンショウウオ生息地」に指定されており、個体のみならず、河川を含む流域が広く天然記念物になっている。

オオサンショウウオは中国山地の渓流域に広く生息しているとされるが、生息地が天然記念物として地域指定されているのは、全国で岡山県真庭市北部、および岐阜県郡上市と大分県宇佐市の一部の3か所のみであり、真庭市北部は中でも圧倒的に広い面積が「生息地」として天然記念物指定されており、専門家の間では真庭市は全国一のオオサンショウウオの里とされている。その一方で、オオサンショウウオは、夜行性の野生動物で生息場所が川の中ということ、また、巨大な図体ながら岩や石に似て目立ちにくいこともあり、その生態は地域住民でさえ知る人は少なく、グロテスクとも思える姿もあり、真庭市民にとって縁遠い存在になりつつあった。

オオサンショウウオに限らず、農山村域において野生生物の保護を進めるためには、地域住民の主体的な保護活動、および、それを生み出す地域システムが不可欠で、そのためにはリーダーとなる人材が必要となるが、過疎（少子）高齢化が進む農山村においては、環境保全や野生生物の保護について専門的な知識をもった人材が少なく、多くの地域で十分な保護活動ができていないのが現状である。

このような状況もあったが、私は仕事ながら1982年よりオオサンショウウオの保護調査にかかわることも多く、1997年より「津黒いきものふれあいの里」という自然観察公園の整備と管理運営にかかわってきた。



オオサンショウウオ生息地での環境学習ツアー

そして、真庭遺産研究会の設立当初より「特別天然記念物オオサンショウウオ」および「オオサンショウウオの棲む清流の環境」を真庭遺産（真庭地域の自然文化遺産）としてスポットライトをあて、保護保全について調査および啓発活動を進めてきた。

これまで真庭遺産研究会として実施してきた活動は、真庭地域における河川生態系の保全を目的とした人と川との共生関係や、河川改修など工事における住民参加型の川づくりを考えるにあたっての必要な情報の収集である。

あわせて、オオサンショウウオ生息地において、良好な自然環境の残る河川域およびその背後地となる森林域をハンザキ・サンクチュアリー（生態系保全区）として永続的な保全をはかるべく、生物多様性に係る環境調査や清流域をフィールドにした自然学校活動を展開しており、オオサンショウウオの棲む源流環境を紹介したパンフレットを作成し、源流環境の保全再生について紹介するとともに、子どもたちとその保護者に源流の自然を紹介するエコツアーを試行開催した。

2006年夏には、真庭市および新庄村で環境や観光、まちづくりにかかわる個人・団体と「グラウンドワーク真庭設立準備会」を発足させ、「河川を生かした協働のまちづくり」の活動を展開しており、真庭市（企画政策課）などと協働して「環境まちづくりセミナー」を2007年より毎年開催するとともに、パンフレット（川と真庭遺産を活かした協働型環境観光事業）を作成し、オオサンショウウオをシン

ボルとした旭川の資源活動を提唱してきた。

そのような経緯もあり、真庭地域では湯原温泉の旅館関係者を中心にオオサンショウウオをシンボルとした「エコな観光」にこだわる機運が高まり、地域住民、地元行政機関、環境NGO・NPO、大学等研究機関、専門家、観光協会など多様な人々が連携し、特別天然記念物オオサンショウウオを地域資源とした温泉街の再生やエコツーリズムなどの観光交流事業が展開されるようになった。

そして、2010年9月には、オオサンショウウオが「真庭市の動物」に選定されるとともに、全国各地からオオサンショウウオの研究者・専門家を招いてオオサンショウウオの全国大会を湯原温泉を会場に開催するまでになった。

活動についての今後の展望

以上、二つの活動事例を紹介させてもらったが、いわゆる観光地と呼ばれるものの中には、施設や風景が有名かつ魅力的で、それ一つでも多くの集客が訪れる地区と、ある特定の地区が美しく魅力的で観光客の収容能力の高い地域など、多種のメディアで多く取り上げられている地域がある。しかし一方で、従来からの有名観光地では満足できず、自分の個性・感性にあわせて、日本らしさの残る地域を旅する観光客も増えている。そこで、風雪に耐えながら地域に残るその土地固有の風景や自然、文化遺産についてスポットライトをあてることで、様々な人がそれぞれの得意とする分野から意見を述べ、地域住民がその存在について認識を深め、保存意欲やそれを資源に地域づくりや観光交流を進めようという機運が高まっていく。こうして時間はかかるものの、結果的に美しい自然や風景が地域に残る。そして、そういう風情ある田舎を求めてやってくる観光客が少しずつ増えることで、農山村における自然保護や景観保全の意識が高まり、地域意識の変化がさらなる来訪客の増加や誘引につながるとともに、美しい日本の景観がよみがえるという地域システム

づくりも必要である。

私たちの行ってきたことは、観光客誘致のために外部に向かって観光情報を発信することよりも、地域住民について、ふるさに残る自然や風景のもつ魅力やポテンシャルを根気強く語りつづけることで、残したい日本の風景あるいは地域の自然文化遺産として大切に、地域資源として活用しようという発想である。もちろん、外部への情報発信は必要であるが、メディアが普及した現在、相当な資源を有しない限り、表面的な情報発信だけでは、人の心をつかめないという状況にもある。

今後は、地域に暮らす地元農家や一般住民・市民が主体となって事業参入することで、地域産業としての広がりが生まれ、観光が農村において誰でも参入できる仕事となり、その結果として、地域雇用の創出や地域の再生・活性化に結びつくことも多くなると思うが、そのときに必要とされるものが、地域固有の美しい自然や風景であり、それを地域資源として活用できる人材である。私たちが進めていきたい自然学校事業やエコツーリズム事業はそのことも目的・目標としている。

著者略歴：

徳永 巧（とくなが・たくみ）

1956年岡山県落合町（真庭市）生まれ、1974年3月に静岡大学人文学部卒業、落合町役場に勤務後、1983年に自然環境系の環境調査会社（株式会社環境アセスメントセンター）を設立し、取締役になる。1988年より同社の代表取締役に、現在に至る。1993年に晴れの国野生生物研究会、1999年に真庭遺産研究会を設立し、蒜山地域での景観保全、特別天然記念物オオサンショウウオの保護をはじめ、農村自然景観や地域の自然文化遺産の保全活動に取り組んでいる。

また、自然・景観の保全と観光交流・「田舎暮らし」を結びつけ、地方（農村）から「美しい日本の自然と風景の保全再生」の流れを呼びおこそうとする活動が評価され、2005年にオーライ！ニッポンのライフスタイル賞を受賞するとともに、政府の観光カリスマ百選に認定される。

2004年よりグラウンドワーク大山蒜山の前身となる第7回全国草原サミットIN大山蒜山実行委員会を組織し、大山地域での環境保全活動を本格的に開始する。2008年4月にグラウンドワーク大山蒜山を設立し代表者になる。